

研究奨励交付金（プロジェクト研究） 報 告 書

令和5年度採択分
令和6年5月21日作成

研究課題名（和文）ハワイのダイバシティ社会と日系人—歴史・現状とアイデンティティ・信仰をめぐって

研究課題名（英文）Diversity of the Hawaii's Society and Japanese descendants: History, Current Situation, Identities and religions

研究代表者

氏 名 岡本雅享
福岡県立大学 人間社会学部・教授

研究組織

氏 名	所属研究機関・部局・職	役割分担（研究実施計画に対する分担事項）
岡本雅享	人間社会学部教授	ハワイにおける日系移民と先住民族、諸地域出身の移民によるミックス・カルチャーの研究（総合）ほか
藤澤健一	人間社会学部教授	同上研究（沖縄出身者関係中心）ほか
池志保	人間社会学部准教授	同上研究（フラが果たす心理的意義中心）ほか

研究奨励交付金（配分額）

1998,360円

研究成果の概要（当該研究期間のまとめ、できるだけ分かりやすく記述すること。）

本年度は初年度で、またコロナ禍を挟み、研究代表者も6年ぶりのハワイ現地調査となり、また当初、現地調査を共に行う予定だった藤澤教授が現地へ行けなくなり、次年度に行く予定だった池准教授が行くことになった。そこで文献・情報収集と現地の研究者たちとのネットワークの維持・拡大など、次年度へ向けた基盤調査・研究を主に行った。3月25～30日の現地調査では、学生向け研修で訪れるべき場所を、初訪布の池准教授と訪問しつつ検証し、またハワイ大学の担当者と面談・協議を行うなどした（具体的な調査・研究内容は以下を参照）。

研究分野／キーワード

ハワイ／ダイバシティ／日系人／アイデンティティ／信仰

1. 研究開始当初の背景

福岡県は、沖縄、広島、山口、熊本県と並ぶ米国ハワイ州における日系人移民の五大出身県の一つである。全米初の日系人州知事であるジョージ・アリヨシ（第3代ハワイ州知事）が福岡県築上郡（現豊前市）の出身であったことが縁で、1981年9月に福岡県とハワイ州が、双方とも初めてとなる国外自治体との姉妹提携を締結し、翌82年1月には福岡県議会とハワイ州議会が国際友好親善促進盟約を締結した。それ以来、5年ごとに訪問団が往来したり、福岡県立水産高校の実習船が毎年ハワイに寄港してハワイの高校生と交流するなど、様々な交流が継続的に行われている。2017年の姉妹提携35周年には、福岡県知事をはじめとする代表団がハワイを訪れて盛大な記念式典が行われ、福岡県知事が友好関係の強化を唱えた。2023年4月には、コロナ禍で1年延期になった40周年記念行事がオアフ島で行われ、グリーン州知事と共に40周年の確認宣言に署名した服部県知事が「今後も様々な分野で交流し、絆を一層強くし、未来の世代につなぎたい」と述べている。

福岡県立大学では、人間社会学部の郝暁卿（元）教授、藤澤健一（現）教授がハワイ大学本校＝マノア校にVisiting Scholarとして在籍して1年間の在外研究（国外研修）を行い、岡本雅享（現）教授が複数回にわたり、マノア校を訪れ、学術交流を行ってきた。学生においては2014年にハワイ大学分校のカピオラニ・カレッジにおける語学研修（国際交流部会主催、水野邦太郎元准教授が引率）を実施し、2018年には岡本雅享（現）教授が引率した公共社会学科の社会調査実習でマノア校の宗教学部、アメリカ学部の教員（Michael Mohr教授、Dennis M. Ogawa教授）とも交流してきた。福岡県設置の県立大学として、こうしたハワイ州と福岡県、ハワイ大学マノア校と福岡県立大学間の学術交流、教育上の連携の成果をさらに継続・発展させていくことが望ましい。

また研究代表者（岡本）は2008年度、米国本土のサンフランシスコ州立大学民族学部（College of Ethnic Studies）でVisiting Scholarとして1年間、米国本土の民族研究（Ethnic Studies）の最前線の状況を研究するとともに、1週間オアフ島を訪れ、ハワイ大学マノア校のGeorge Tanabe教授やMichael Mohr教授（いずれも宗教学）、Dennis M. Ogawa教授（American Studies）、ハワイの日系寺社の神職・住職らと交流・対談し、現地調査を行い（2009年3月）、その成果を論文「民族宗教とアイデンティティ—北米・ハワイからみる神道」（『アジア太平洋研究センター年報』2008-09年）にまとめた。その中で、ハワイにおける日系人中最大のコミュニティである沖縄出身者と先住民族ハワイアンが信仰面で、より高い親和性をもつことが分かったため、2013年4月には、Dennis M. Ogawa教授の下で学ぶ沖縄県出身の大学院生とその友人の協力を得ながら、オアフ島各地にあるハワイ先住民族の聖地であるヘイアウを巡る現地調査を行い、また日本の近代化の中で「迷信」として否定され、日本本土では見られなくなった「憑き物おとし」などが、その影響を受ける前に渡布した日系移民の間で受け継がれている状況を、実際行っておられるハワイ東大寺の平井住職からうかがうなどした。2018年2月の公共社会学科の社会調査実習では、ハワイ大学マノア校のMichael Mohr教授やDennis M. Ogawa教授らの協力を得ながら、学生とともに現地調査を行い、西日本の出身者が多いハワイで、神社の中では東日本の伊勢ではなく、出雲大社の分院が最も大きな信仰盛行している状況などにも注目した（成果の一部は『千家尊福と出雲信仰』ちくま新書、2019年）に所収。

研究分担者（藤澤）は近現代の沖縄教育史研究に従事してきた。2011年度にはマノア校においてvisiting scholarとして滞在し、同校ハミルトン図書館所蔵のホーレー・サカマキコレクションにかかわる史料調査を実施した。その成果を編著作『沖縄の教師像—数量・組織・個体の近代史』（榕樹書林、2014年）としてまとめた。滞在中は該コレクション以外の調査として、ハワイに存する沖縄関係文献・史料を博搜するとともに、ハワイ在住の沖縄出身者による文化伝承、歴史教育に実地で触れる機会を多く得た経緯がある。くわえて、歴史研究の観点から、沖縄出身者のライフヒストリー研究に取り組んできた。

研究分担者（池）はこれまで創造性に関する心理学研究を行っており、国内外で音楽、美術、芸術に関する学会発表を行ってきた。それらを踏まえ、フラ・カヒコとレイに込められたハワイの人々の自然崇拝とその心理、フラが果たしている心理的意義の研究につなげたいと考えている。

2. 研究の目的

《ハワイ大学マノア校（本校）と福岡県立大学の学術交流・教育連携の継続的発展》

前述の本学教員・学生とハワイ大学マノア校との研究・教育交流を一層発展させる。ハワイ大学マノア校は米国の中でも著名な総合大学であり、社会科学（社会学、政治学、経済学、心理学、地理学等）、人文科学（哲学、芸術、音楽）、教育学、医療技術、看護学・歯科衛生学、社会福祉学、自然科学（生物学）などの学部学科を擁し、福岡県立大学の教育や教員の研究分野とも幅広く対応している。また英語圏でありながら日系人が多く、また福岡—ホノルル間の直行便があるハワイへの留学を希望する学生は、本学にもいると思われる。世界140カ国と地域出身の約1万8000人の学生が学ぶハワイ大学マノア校に留学すれば、学生の視野も大きく広がることが期待できる。

《ハワイにおける日系移民と先住民族、諸地域出身の移民によるミックス・カルチャーの研究》

・ハワイには数多くの神社や日系寺院があり、長いものは1世紀に及ぶ歴史を刻む。日系移民が北米大陸に建立した神社が戦後ことごとく廃絶されたのに対し、ハワイ諸島で存続している背景には、ポリネシアをルーツとするハワイ先住民族の文化・信仰が社会基盤にあるハワイアン文化と本来アニミズムである神道との親和性があるとみられる。実際ハワイでは、日系人の移住以降、それまでハワイではなかった河童や猿（むじな）に似た妖怪の目撃証言が、ハワイ在住の白人の間で生じたり、地藏が海難から守ってくれるGuardian of the Seaとしてサーファーの間で海辺に祭られるなど、非日系人の間に日系の文化や信仰が伝播したとみられる現象がある。日系人の神職がいなくなったマウイ島の金比羅神社を、ハワイ先住民族が海神として祭り続けている例もある。

前述した、これまでの日系人に注目した研究だけでは、モザイク社会といわれるハワイの多様性の一部しか見えていなかったとともに、その中での日系人の位置づけも分からない。2018年の訪布で、Dennis M. Ogawa教授の下で日系人移民のライフヒストリー調査を行ったGlen Grant氏（1947～2003年、この調査が著書『OBAKE—Ghost Stories in Hawai'i』を生んだ）の後継者であるハワイアンの語り部Lopaka Kapanuiと面談し、ハワイではハワイアン、日系、中国系、ポルトガル系、フィリピン系、韓国系などの「ゴースト」がミックスされていることを知った。ハワイ出雲大社の天野宮司から、人口の4分の1が複数の人種をルーツにもち、3つや4つのルーツをもつ人も少なくないハワイでは、もはや「日系人」という枠組みも現実的ではなくなっているともうかがった。そうした「日系人」が多様化する中、日本人移民と共に渡来した神社や寺院も、日本で通用する通過儀礼や葬式仏教では存続が難しく、神社の神職がハワイアンのお祓い（魔除け）や住宅の地鎮祭を行ったり、寺院の住職がプロのコウンセラーも兼ねるなど、ハワイアンやアジア系移民のアニミズムや、哲学、カウンセリングとしての存在意義を模索している。

本研究では、前述の研究を発展させつつ、「日系人」が身を置く、ハワイ社会の多様性と、その中での「日系人」の立ち位置、日系宗教の存続をかけた取り組みに視野を広げ、文献と現地調査を行うことを目的とする（岡本）。

・日本の神話や昔話には森羅万象、いたるところに八百万の神が宿るとする自然崇拝の考え方があり、ハワイの信仰には自然崇拝が深く根付いている。伝統舞踊フラダンスの元になったフラ・カヒコ（Hula Kahiko）は宗教的な儀式でもあるとされる。フラで用いられる装飾品レイの材料に

は植物や花などが用いられ、そのルーツには自然崇拜が含まれている。そうしたフラ・カヒコとレイに込められたハワイの人々の自然崇拜とその心理について調査し、フラが果たしている心理的意義について明らかにする（池）。

・ハワイの日系人中、最大のコミュニティである沖縄出身者の、ハワイ移住にかかる歴史・経緯・実態などを、ハワイに残る文献・史料から明らかにする（藤澤）。

《福岡県立大学生のハワイ研修立案にかかる調査・検討》

・本学で学ぶ学生が福岡県と姉妹提携を結ぶハワイ州を訪れ、ポリネシア文化に根差すハワイアン文化を基盤としながら、様々なルーツをもつ人々が多様に協力し合って築いてきたハワイ社会と、福岡県出身者をはじめとする日系移民の歴史や現状を学び、福岡県とハワイ州の交流にも資する研修プログラムを提案するための現地調査、現地協力者の開拓を行う。福岡県立大学で以前実施していたハワイ研修は、2週間の語学研修で、参加費用が50万円以上という高額であった。英語の語学研修としては、Stuart Gale教授が担当してきた英国語学実習が実績のあるものとして定着してきた中で、それと重複する英語の語学研修を、50万円という高額な費用を払って参加する学生は少なく、またハワイ大学分校（カピオラニ校）からの条件で、一定数の学生参加がなければ実施できず、実施できたのは、福岡県からの助成金が得られた年の1回だけであった。しかしながら学生の間でハワイ研修の希望はある（以前あったハワイ研修はしないのか、という学生からの問い合わせもある）。研究代表者（岡本）は、国際交流部会員であった際、三育大学で行われる韓国語学研修とすみ分ける形で、大邱韓医大学、威徳大学との学生交流・文化体験学習などを主体とする、学生が費用的にも参加しやすい韓国短期研修（スタディ・ツアー）を立案し、軌道に乗せた。語学研修でなく、期間を1週間程度に減らすことで、一定参加人数の制約はなくなり、参加費用も半額近くにおさえ、実施しやすく、学生が参加しやすくなると思われる（岡本、池）。

3. 研究の方法

①ハワイアン（先住民族）の文化復興・ハワイ語再活性化運動の経緯と現状について、文献・現地調査で明らかにしながら、ハワイにおける多文化主義の理念を考察する（成果は担当講義「多文化社会論」で本学学生にも還元する）。

* 研究代表者（岡本）は長年、民族・移民研究に従事し、1992-93年、中国の中央民族大学（北京）に在籍しながら中国各地の少数民族の漢語と民族語による二言語教育を調査し、その成果を『中国の少数民族教育と言語政策』（社会評論社、初版1999年、増補改訂版2008年）としてまとめた。また2007年以降、台湾先住民族の民族語の維持・発展のための学校教育教材づくりなどに携わってきた台湾の国立政治大学原住民研究中心（先住民族研究センター）の研究者たちと学術交流（資料交換、政治大学での講義など）を続けてきた。これらの研究で蓄積してきたノウハウをハワイに適用するものである（岡本）。

②前述した日系の神社や寺院の存続をかけた取り組みを調査し、その成果を考察する。特に、ハワイ全島で90、オアフ島だけで34を数える日系寺院の現状を調べ、礼拝時のパイプオルガンや説教など、キリスト教的要素を取り入れたり、心療的なカウンセリングを行なうなど、米国の中のハワイ州という状況に適応した変化を試みている寺院や住職の取り組みや成果について調査・研究を行う。沖縄では10代の頃に発生しがちな神がかり状態などのケアを民間巫者（ユタ）が行う慣行があるが、米国では、ハワイに渡った沖縄出身者が同様の状態になると、キリスト教的な世界観の中で、精神

病院に入れられるケースが多かったという（中牧弘允「ハワイにおける日系霊能者と民間信仰」『国立民族学博物館研究報告』5巻2号）。それに対し、アニミズムを理解する日系宗教者や巫者が対応する（カウンセリングを行う）ことで、病院に入院させられることなく、日常生活を送りながら、精神的な安定を得られる場合がある（岡本）。

③ハワイにおける一大エスニックグループとされる、沖縄出身者にかかわる基礎的な調査研究を、最初期、移民一世であるとともに、沖縄研究史において重要な位置を占めながら、これまでその言説が体系的に捕捉されてこなかった、牧師であり社会運動家でもあった比嘉賀秀（のちに比嘉静観）に着目して行う（藤澤）。

④関連文献を収集し、ハワイ大学マノア校の心理学者の中で連携できそうな研究者リストを作成する。またオアフ島での現地調査では、①予備調査（ハワイ大学マノア校の研究者や現地のフラ指導者との面談）、②文献収集を行なう（池）。

4. 研究の主な成果

・2023年度は「ハワイ大学マノア校」の組織・機構及び同大学の研究者のうち、本学の研究者と共同研究が行えそうなテーマの研究者の一覧を作り、附属研究所及び国際学術交流部会に提供した。

【岡本】

2023年度は松原好次編著『消滅の危機にあるハワイ語の復権をめざして—先住民族による言語と文化の再活性化運動』（2010年）、白水繁彦編『多文化社会ハワイのリアリティー—民族間交渉と文化創生』（2011年）などの先行研究文献を収集し、19世紀末にかけて英語の公用語化に伴い、ハワイ語を教育言語とする学校が閉鎖され、家庭におけるハワイ語使用やフラなどの民族的伝統も禁止された結果、ハワイアン文化が衰退し、20世紀半ばにはハワイ語で生活する人々がニイハウ島の200人のみにまで減少したこと、それが米国本土の公民権運動や1970年代のハワイアン・ルネッサンス、先住民族の言語や文化の復権運動で先行していたニュージーランドのマオリとの交流、先住民族出身のワイヘエのハワイ州知事就任（1986年）などをへて、1980年代以降、ハワイ語やハワイアン文化の再活性化運動が急速に進み、学校教育等にも広がった経緯などを把握した。同時に松原や白水の後、この分野を引き継いで調査をしている日本の研究者が見当たらないことも分かった。

2024年3月25～30日のオアフ島現地調査ではIzumo Taishakyo Mission of Hawaii、Hawaii Kotohira Jinshaなどオアフ島に所在する主要な日系の神社・寺院を訪ね、コロナ禍をへた信仰や信者を含む近年の動向を把握し、またMichael Mohr教授（宗教学部長）、Dennis M. Ogawa名誉教授（American Studies）などと面談し、コロナ禍を挟んだ近年の動向等を伺い、2024年度の調査の基盤を整えた。またハワイ大学マノア校所属・出身の研究者でハワイアン文化・言語の復興活動・研究に携わってきたMāpuana Hayashi-Shimpliciano（Director, Lili'uokalani Trust, 教育学博士）、Ethnic Studiesの研究者であるDr. Kyle Kajihiraなどと初めて面談し、ネットワークを広げるとともに、今後の共同研究・学術交流について相談した。

【藤澤】

前述した比嘉賀秀（のちに比嘉静観）による膨大な論説、詩作などの文学作品、関連資料について関連文献、新聞史料を対象に全体像の把握を企図した。その結果、未だ全体像の把握には至らず、

今後の調査を不可欠とするものの、主要著作物を中心に目録化の方向性を得るまでに至った。

本研究の分担として、ハワイにおける一大エスニックグループとされる、沖縄出身者にかかわる基礎的な調査研究を実施した。その際、最初期の移民一世であるとともに、沖縄研究において重要な位置を占めながら、これまでその言説が体系的に捕捉されてこなかった、比嘉賀秀（のちに比嘉静観）に着目した。比嘉は牧師であるとともに、詩作などの文学活動、社会活動にもかかわることで、日系人、あるいは沖縄人コミュニティに一定の影響力を長きにわたり及ぼした人物として知られる。ここでは比嘉にかかわる研究史に関する説明は控えるが、その言説に注目することが学術的な意義を有することについては衆目の一致するところである。

本研究では、比嘉自身による膨大な論説、詩作をはじめとした文学作品、関連資料について関連文献、新聞史料を対象に、その全体像を把握することを目的として設定した。方法として、関連文献の渉猟から着手し、ハワイ大学マノア校ハミルトン図書館などの関連機関HPを通じた所蔵調査を実施した。新聞や雑誌などに掲載された文献については、フーバー研究所が公開する邦字新聞データを悉皆的に閲覧・調査した。このうち主要著作としては、共著をふくめ以下の存在を確認した。

伊波普猷・比嘉賀秀『人生と宗教』おきなほ社、一九一五年

比嘉静観『詩集 赤い涙』一九二一年

比嘉静観『現実の悪魔』一九二一年

比嘉静観『戯曲 姉と妹』一九二一年

比嘉静観『生命の爆音』実業之布哇社、一九二二年

比嘉静観『人間・社会』実業之布哇社、一九二四年

比嘉静観『赤い恋』実業之布哇社、一九二四年

比嘉静観『姉と妹』一九二五年

比嘉静観『自顔』洋園時報社、一九二七年

以上に加え、詩作や新聞記事をふくめた関連論稿については、その総覧を今後、作成する予定である。本研究では、比嘉の著作にかかわる全体像の把握には至らず、今後の調査を不可欠とするものの、主要著作物を中心に目録化の方向性を得るまでに至った。今後、本研究の成果を継承・発展することで、比嘉静観著作集の編集と刊行を構想することができる。

【池】

関連文献を収集し、ハワイ大学マノア校の心理学者の中で連携できそうな研究者リストを作成した。主な文献として以下に列挙する。Joseph Keawe'aimoku Kaholokula et al. (2021) A Cultural Dance Program Improves Hypertension Control and Cardiovascular Disease Risk in Native Hawaiians: A Randomized Controlled Trial、Camilla G. Wengler Vingnoe(2015) Living Aloha: Portraits of Resilience, Renewal, Reclamation, and Besistance、Chamaine I. Kaimikaura(2010) The Politics of Cultural Preservation: Communicating Identity, Resistance, and Empowerment for Hawaiians in a Southern California HULAHALAUなど。また2024年3月25日から31日までオアフ島での現地調査では、①予備調査（ハワイ大学マノア校の研究者や現地のフラ指導者との面談）、②文献収集を行なった。

【岡本・池】

2023年度は、韓国短期研修を応用する形で、学生交流や文化体験学習などを主体としたハワイ短期研修を立案する旨、国際交流部会に素案を示し、了承を得た。また今後、本学教員が共同研究相手を探したり、学生が留学を考える際の参考になるよう、本学と関連する学部や学科、研究センター及びそれらに所属する研究者の概要をまとめた「ハワイ大学マノア校の概要」（添付資料）を作

成した。3月25～30日のオアフ島現地調査では、ポツダム宣言署名の現場等を残したミズーリ博物館、ハワイの日系人の歴史を展示するJapanese Cultural Center of Hawaii、ハワイアンの歴史と文化を展示するBishop Museumなどを訪れ、学生研修に相応しいかどうかを検証した。またハワイ大学マノア校のInternational Programsの担当者、Dr. Saori Doiと面談し、福岡県立大学学生が短期留学を行う場合についての情報を提供いただいた。

5. 主な発表論文等

6. その他の研究費の獲得